
この街で起きた奇跡

ちょこ丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この街で起きた奇跡

【Nコード】

N5148V

【作者名】

ちよこ丸

【あらすじ】

昔の過去を引きずりながら学生生活を送る主人公「菊池春仁」は高校に入学する。

その日をさかいに彼の日常が少しずつ色づき始める。

『振り向けば青春だった・・・』

第一話「夢を見た日」

それは突然の出来事だった。

そして一瞬の出来事だった。

『母さん!! 父さん!! ……』

…っ!!

俺は夢を見た。

それは、俺の昔の嫌な記憶。

俺の両親が死んだ時の記憶だ。

俺が中学三年の時、交通事故で両親が死んだ。

車の衝突事故だった。俺は奇跡的に助かったけど事故の時に負った怪我の痕は残っている。

たまにこうして夢に出るとその傷が痛む。

俺の名前は菊池春仁^{きくちはるひと}だ。今日は高校の入学式。

俺は少し早めに目を覚ました。

春「あー、目覚めだったな・・・」

まったく、入学式だったのに何で嫌な気分だろう。

あまりスッキリしない気分で学校に行った。

今までの俺は親戚の家を転々としていたが、高校に上がったと同時に一人暮らしを始めた。

父さんや母さんの保険金などがあるので生活にはあまり困らない。

学校に着くと見慣れた顔があった。

春「優貴、よっ!」

優「あっ、春仁。お前にしては早くないか?」

こいつは足立優貴^{あだちゆうき}。

中学の時から一緒に俺の相棒的な感じだ。

春「なんとなくだよ」

優「なんとなくねえ・・・」

春「そう、なんとなくだよ」

優「ふーん、まあ、早くクラス表見にいこうぜ」

春「ん？あつ、そうだな」

俺と優貴は掲示板に貼ってあるクラス表を見に行った。

優「なあ、春仁。あのロングの子可愛くない？」

春「お前は目付けるの速いな」

優「それは、褒め言葉として受け取っておこう」

優貴は女好きですぐにこうやって可愛い女の子に目を付けている。

優貴も俺も顔はいい方なのであまり女に困ったことはない。

中学の頃も俺たち二人が一緒にいたらかなり目立っていた。

優貴は女遊びが激しいので少し有名になっていたくらいだ。

春「優貴、女遊びもほどほどにしるよ」

優「んなこと言って、お前もしてたる」

春「優貴ほどじゃねえよ」

優「まあ、俺はプレイボーイだからねえ」

春「超の付くプレイボーイだもんな」

優「そうそう、よくわかってるじゃん」

偉そうに言つなよ。

春「ってか、クラスは？」

優「ん？俺もお前も同じA組だったぞ」

春「そうか。じゃあ、早く教室行くぞ」

優「おう、そうだな。あつ、それとAには咲耶ちゃんもいたぞ」

「咲耶」という名前を聞いた俺は少し教室に行くのを躊躇した。

横溝咲耶^{よこみぞ さくや}。中学の時に転校していった女子だ。

ずっと、俺にくっついてきてちよっと鬱陶しい奴だった。

優「咲耶ちゃんも可愛かったなあ」

春「じゃあ、優貴にやるよ」

優「そうしたくてもできないと思うなあー」

春「俺のこと忘れててくれないかな」

優「咲耶ちゃんに限ってそれはないでしょ。それにしても戻ってきてたんだね咲耶ちゃん」

春「戻ってこなくてよかったのに」

優「冷たい男だねー」

春「うるせえ」

だいたい、あの夢を見た日はあまりいい日じゃないんだよ。

第二話「誰かに呼ばれた・・・」

咲「はるうー!!」

春「おい、咲耶。抱きつくな」

咲「ぶうー、別にいいじゃん!!」

春「文句言っても離れようとしなのか」

咲「当たり前じゃないか!!」

はあー、教室に行くと咲耶はもういてすぐに抱きついてきた。

優「いいなあ、春仁は」

春「どかがだよ」

優「いいじゃん、愛されていて」

春「じゃあ、代われよ」

咲「はるじゃなきゃいや!!」

優「ほら!だから、愛されてるっていったろ」

はぁー、なんでまた咲耶に付きまとわれないといけないんだよ。

ほら、みんなの視線が痛いよー。

？「あれあれ？ここに、女子に抱き着かれているのに嫌そうにしている馬鹿野郎がいるぞ」

あぁ？誰だこいつ。

なんか、後ろからいきなり話しかけられたし。

？「いや、失礼。僕の名前は戸谷日向だ」
こたにひめうが

春「は、はぁ……」

日「……もつと、リアクションしてよー!」

あっ、じいじめんどくさい。

咲「んうー、日向って奴うるさい。せっかくはるとのほほんとしてるのこ」

日「あっ、す、すんません」

春「つてか、咲耶もさつさと離れるよ」

咲「いやだ!!」

いやいや、嫌じゃないでしょうが。

春「優貴ー、なんとかして」

優「俺じゃ無理だから」

春「見捨てる気か？」

優「いやいや、見捨てるもなにも本当に無理だから」

春「諦めたらそこで試合終了だぞ」

優「何言ってるんだよ」

はあー、それよりほんとに咲耶には離れて欲しいんだけど。

日「ところで、イケメン二人。ちょっと、話を聞いてもいいかな？」

優「イケメン二人って、俺と春仁のこと？」

日「それ以外に誰がいる？」

優「いない!!」

日「いや、そんなにはつきり言われても困る」

春「そんなことより話してなんだよ?」

日「ああ、そうだったな。実はお二人さんに会いたがっている人がいるんだよ」

優「男?女?」

日「可愛い女の子だったよ」

優「おっ、マジで!?!じゃあ、早く会いに行こうぜ!」

春「お前なあ・・・」

日「じゃあ、早速行こうか。あつ、あと、咲耶ちゃんだけ?君は付いてきたらダメだよ」

咲「ええー!!何でええええ!?!」

ちよ、こんな至近距離で叫ぶなよ。

耳がおかしくなりそうだ。

日「何でって言われても連れてくるのは二人しか許されてないから」

咲「納得いかないよ・・・」

春「まったく、納得するもしないもないだろ。ダメなもんはダメなんだから」

咲「はい・・・」

咲耶はすんなり離れて俺たちは戸谷について行った。

優「で、可愛いつて本当なの？」

日「ん？ああ、それはちょっと違うかな」

優「はあ？どういうことだよ？」

日「あの人は可愛いとは言えないですね」

優「お前、騙しなのか？」

日「いいや、確かに可愛いけど性格は可愛くないですよ」

優「そ、そうなのかあー」

なんだ、この馬鹿な会話。

優貴の女好きをなんとかしてほしい。

いや、これ結構切実ですよ。

日「あっ、ここです」

そういつて戸谷に連れてこられたのは生徒会室だった。

優「なんか問題でも起こしたか？」

春「いいや、俺はなんにもしてねえぞ」

そう、生徒会に呼ばれるようなことはまだひとつもやっていない。

日「とりあえず入ってください」

そう言われて俺たちは生徒会室に入った。

第三話「嫌な奴」

春仁side

生徒会室には女の人が一人いた。

優「おっ！可愛いなあ」

春「お前はそれしかないのか？」

優「うるせえ」

「つたく、優貴はすぐにごうなる・・・。」

？「あなたたち、少しは緊張感をもったらどう？」

春、優「「はあ？」」

？「ここは、生徒会室なの。常に緊張感があっておかしくないところよ」

優「んなこと知るか」

？「態度まで悪い」

優「喧嘩売ってんの？」

？「あなたたちみたいの人に喧嘩うるほど暇じゃないのよ」

春「あっそ。でも、名前も言わずにペラペラ喋り出すのもどつかつと思っけど？」

？「あれ？私、名前言ってなかったっけ？」

優「言ってない」

？「それは失礼。私は生徒会長の蕭紀朱音しよつきあかねです」

優「まあ、たいそうな名前で」

優貴の奴、機嫌悪いな。

まったく、短気なところがこいつの弱点なんだよなあ。

優貴 side

なんか嫌な奴だなこいつ。

まったく、生徒会長じゃなかったら絶対に殴ってる。

春「それで、本題は？別に喧嘩売るために呼んだわけじゃねえだろ」

朱「そうですね」

何で春仁はあんなに落ち着いてるんだよ。

朱「実はあなたたちに聞きたいことがあるの」

優「聞きたいこと？」

朱「そう。あなたたちは松井遥という子を知ってる？」

『まついはるか
松井遥』

その、名前を聞いた時、春仁の表情が曇った。

春「それがどうした？」

朱「その子について少し聞きたい事があるの」

春「なんだ？」

朱「松井遥がなぜこの街からいなくなったのか。知ってたら教えてくれないかしら？」

春「・・・悪いけど俺たちは知らない」

朱「そう、ならもういいわ」

春「そうか。じゃあ、優貴帰るぞ」

優「お、おう」

春仁side

あの夢を見た日はあんまりいい日じゃない・・・。

それを裏付けるような出来事だった。

第四話「会に行っちゃっよー!」(前書き)

どうも) * (/ .

ちよこ丸です!!

今回は全部優貴目線です!

第四話「会いに行っちゃっよ!」

優貴 side

あれから春仁の様子がおかしい・・・

というより、昔に戻った感じだ。

あれから人を避けるように過ごしている。

まあ、俺はいつつも春仁といえるけどね。

昔の事情を知っている俺だけだろう、春仁に関わっている奴は。

咲耶ちゃんが抱きつこうとしたら避けてなるべく関わらせないようにといった感じに見える。

元気ない春仁はつまんねえ。

優「春仁、なんか変だぞ?」

春「変ねえ・・・」

優「今日さあ、遙に会いに行く?」

春「そうだな。いつまでもこんな感じで過ごすわけにもいかないし

な

優「じゃあ、今日は早退すっか？」

春「そんなことしたら不自然に思われる」

優「じゃあ、サボれないじゃんか」

春「なに、サボる前提で話してたんだよ」

優「まあいいや。とりあえず、今日の放課後に行くか」

春「おう」

春仁を元気にさせるのはこれが一番。

きつと、春仁も分かっていると思う。

明日には元気になつてると思う。

ってことで、これから暇な授業を受けないといけないのか。

なんか、それはそれで嫌だな・・・。

咲「なに話してるの？」

優「うおっ!?!?」

春「なんでここにいるんだよ」

咲「つけてきたっ!!」

優「つけてきたじゃないよ!ここどこだと思ってるの?」

咲「えっと・・・立入禁止の屋上!!」

優「そう!正解!!って、バーカー!!なんで、ここにいるの!?」

咲「だから、ついてきた!!」

優「につこり笑って答えても無駄!意味わかんなし、普通ついてきて立入禁止の屋上に来ないよ!!」

咲「えー!!でも、足立たちも屋上にいるじゃん」

そりゃあ、他の人がいない場所ってここしかないからに決まってるじゃん。

立入禁止の屋上って言っても特別危険ってわけじゃないんだから二人で話すにはもってこいの場所だ。

俺と春仁が入学してすぐに見つけた隠れ家だ。

咲「別にいいじゃん。春仁に会いに来ただけなんだから」

春「優貴、行くぞ」

優「お、おう。いいのか春仁？」

春「いいもなにも迷惑なだけ」

優「冷たいなあ。もうちょっと、女に優しくしたらもっとモテるのに」

春「モテる意味がない」

優「まあ、そりゃそうだけどね」

確かに俺たちはあんまりモテてもなあ・・・。

別にモテて悪い気はしないけど意味はないかもな。

春「今日は早退するぞ」

優「えっ？マジで？」

春「さっさと早退して早く行くぞ」

優「おお！やっぱ、そうこなくっちゃ！！ってことで咲耶ちゃん、先生に伝えといてね」

咲「えっ？あ、う、うん・・・」

優「じゃあ、ばいばーい!」

さてと、なんかテンション上がって来ちゃった。

早く会いに行こう!!

第五話「不安な乙女？」（前書き）

咲耶目線です！

新キャラも登場します！

第五話「不安な乙女？」

咲耶 side

避けられた・・・。

なんか知らないけどこの頃本当に避けられてる気がする。

今までも嫌がられてたけど本気で避けられていたことはなかった。

「はぁー・・・へこむなあ」

・・・

ん？メールだ。

しかも優貴からだし・・・

生徒会長を 病院に呼んでくれる？

これってもしかしてパシリ？

まあ、一応呼んどくけど後でなんか奢らせようつと。

優貴に返事をして携帯を閉じたところにタイミングよく戸谷がいた。

咲「戸谷、優貴が生徒会長 病院に呼んでだつて」

日「うん、わかった。とりあえず伝えとくね」

咲「よろしく」

はあ・・・

それにしても

なんではるに避けられるんだらう？

咲「美香ちゃん！！」

美「ん？？どうしたの？」

咲「慰めてえ」

私の前の席で仲良くなった牧田美香ちゃんまきだみかに慰めてもらいましょ。

美「いきなりどうしたの？」

咲「はるに避けられてる・・・」

美「はるって菊池君のこと？」

咲「うん」

美「ふん。菊池君のこと好きなの？」

咲「うん!!」

美「びつくりした・・・いきなり大きな声出さないでよ」

咲「あつ、ごめん。でも、好きなんだよ!」

美「あゝ、もう、わかったから」

呆れた声で言われたからもう一回好きなんだもんって言ったら頭を撫でてくれた。

やっぱり、美香ちゃんは優しい!!

美「菊池君に彼女でも出来たのかな?」

咲「そ、それはどういことですかっ!?!」

美「だって、彼女がいたら他の女の子が抱きついてるとこ見られたくないでしょ?」

咲「そ、それはそうだ・・・」

美「まあ、彼女がいたららの話しただけだね」

そ、そうだよ!!

彼女なんてきつとこないよ!!

うゝん、でも不安だ・・・

第六話「緊張!」(前書き)

優貴目線で今回進んでいきます。

第六話「緊張!!」

優貴 side

俺は今病院にいる。

それも、東京のでかい病院だ。

ここに来た訳は友達が入院しているから。

まあ、俺たちも高校に入学する前に知ったことなんだけどね。

その友達の名前は『松井遙』。

あることがあって記憶喪失になった。

遙ちゃんの親に会うことを拒まれ続け会わないまま遙ちゃんは引越した。

引越しを知った俺たちはどこに引越したか必死に探してこの前やっとこの病院に入院していることがわかった。

それで今に至る。

優「春仁。お前、遙ちゃんに会うの大丈夫？」

春「んなもん、大丈夫だよ。まあ、今のところだけだな」

優「俺なんか緊張してヤバいんだけど」

春「なんでお前が緊張してんだよ」

優「だって、遙ちゃんに忘れられてたら俺ショックだもん」

春「・・・覚えてるわけないよ」

はあ、これは地雷踏んだかも？

それより受付の人すげえ綺麗だな。

春「優貴、さっさと面会手続き済ませるぞ」

優「お、おう」

俺が女の人に見とれてるのに呆れたのかちょっと哀れんだ目で見られた。

つたく、哀れんで見られるようなことしてないと思うんだけどなあ。

まあ、俺は遥ちゃんに会えるってことでテンション上がってるから誰でも綺麗に見えるんだけどね。

手続きを終えて呼ばれるのを待っている。

春「おい、優貴。少しは落ち着け」

優「ああ？落ち着いてるに決まってるだろ！」

春「じゃあ、その貧乏ゆすりやめろ」

あっ？貧乏ゆすり？

俺は自分の足を見るとすごい揺れていた。

うわっ、マシで緊張してんのかな？

ってか、春仁は落ち着きすぎだよ！！

なに優雅にコーヒーすすってんだよ！！

俺なんか飲み物も喉に通らねえよ！！

ったく、じじいみないな落ち着きようだな。

なんて思っていると名前が呼ばれた。

第七話「一緒に…！」（前書き）

新キャラ目線で行きます…！

第七話「一緒に!」

どうも。

僕の名前は新田友樹にゅうたともきです。

高校一年生です。

僕はある人に憧れてバスケットを始めました。

その、ある人に会えるなんて思ってもみなかったことだった。

〈入学式〉

僕がクラス表を見に行った時だった。

その人は友達と話しながらクラス表を見ていた。

二人はカッコイイのですぐに女の子が集まり出して僕が声をかける
すきなんてなんてなかった。

バスケット部に入るのかな？

入るならまた会えるかも！！なんて思っていた。

だけどその人はバスケットをしていなかった。

なんでだろう？

あんなに上手なのになんでバスケットしないんだろう？

もう、あの人のプレーは見れないのかな？

そう思うと僕はなんか寂しくなっていてその人にバスケットをしてもらおうと思った。

せっかく同じ高校になったんだから一緒にプレーしたい！！

憧れの人と一緒にプレーをしてみたいと思うのは当然のことだと思
う。

第八話「断られたけど」

優貴 side

あちゃー…………。

なんで今この人と会うかな。

ほら、春仁なんて睨んでるもん。

？「どうしてあなたたちがここにいるの？」

優「えっと、、、、」

春「遥のお見舞いです」

？「お見舞いなんてさせませんよ」

優「ちょ、なんでですか!？」

？「なんで？そんなの決まってるじゃないですか。あなたたちもわかるでしょ？」

春「わかりました。じゃあ、勝手に会ってきます」

春仁は遥の母親にお辞儀をして歩き出した。

出遅れた俺は遥の母親に話しかけられた。

母「優貴君だっけ？」

優「あ、はい」

母「遥は今精神的に不安定なの」

優「は、はぁ……」

母「怪我の方は順調で後もう少しで退院できるんだけど、退院した後も病院に通わないといけないの。だから不安を感じてほしくないからあまり昔の遥を知っている人には会わせたくないの。遥のこと

をよく知っていればなおさらね」

優「じゃあ、俺たちみたいに遙と近い人たちは会わせたくないんですか？」

母「絶対にダメってことではないけど遙が前を向くまでは待っててほしいってこと」

優「待つ、ですか？」

母「そう。退院したら学校に行くことになるからね」

優「学校ってどこですか？」

母「うん、それは秘密」

秘密って……

それより春仁をどう説得しよう？

母「遙は寝てるから」

そう言って遙の母親は去って行った。

ってか、昔の刺々しさがなくなっていた。

人って変わるものなんだなとか思いながら春仁の後を追った。

第九話「また明日！」

友樹 side

はあ………

バスケット部に入ってもらって意気込んだものの入学式から一回も会ってない。

どうしよう？

とりあえず、校内を歩き回ってみよう！！

つてことで、ふらふら歩き回っているんだけどいついつに会える気がしない。

なんて思ってたら閃いた！

とりあえず、人に聞こう！！

友「あ、あの・・・」

女生徒1「なに？」

友「菊池春仁って人知りませんか？」

女生徒1「知ってるよ！めっちゃかっこいいよね！！」

おう！！ハイテンションガールだな！！

ちょっとびっくりしたが相手は気にしてないようだ。

女生徒2「でも、一緒にいる足立君もかっこよくない！」

女生徒1「かっこいいけどチャライからな」

友「あ、あの・・・」

女生徒1「あ、ごめん。なんだっけ？」

友「その、クラスとわかる？」

女生徒2「A組だよ」

友「ありがとう」

お礼を言っ て僕はA組に行った。

教室にいたらいいな、なんて思いながら教室を見渡した。

あっ、いた!!!

けど、なんて言っ て話しかけよう？

よしっ！明日話しかけよう!!!

・・・友樹はへたれなのでした。

第十話「今日の運は・・・」(前書き)

今回も友樹目線で行きます!!

第十話「今日の運は・・・」

友樹 side

よしっ！今日こそは菊池さんに話しかけるぞ！！

なんて意気込んで朝練に来たけど全然シュートが入らなくて凹んでいます。

友「はあ・・・。僕ってやっぱり下手だなあ」

？「なに？天下の友樹君が悩み事ですか？」

もう一本シュートを打とうとしたとき沢村拓也さわむらたたくやに声をかけられた。

友「なんだよ天下って」

拓「だって、お前は3Pシュートの天才って呼ばれてるじゃん。始めて間もないのにこれだけ入るのはすごいってさ」

友「でも、拓也だってゴール下での活躍はすごいだろ？」

拓「もちろん！俺には身長と脚力があるからね」

友「僕には身長がないからね」

それに、拓也は小学生のときからバスケットをやっていて経験もあるけど僕にはそれがない。

3Pシュートだって素人にしては入るぐらいのレベルでまだ拓也のほうが確率は高い。

友「シュッ！」

ガンッ！

拓「あれ？今日は調子の悪い日？」

友「うるさい」

だいたい僕のシュートはそんなに入るものじゃない。

拓「なあ、友樹。ちょっと1o r 1の相手してくれないか？」

友「うん、いいよ」

どうせ、このまま続けても入らないと思った俺は拓也の相手をすることにした。

拓「ッシ！やるか！！」

拓也がオフェンス、僕がデフェンスで1o r 1は始まった。

5回勝負して5回負けた。

デフェンスで俺が勝てるわけもなくすべてのシュートを決められた。

オフェンスでは3Pを打つても入らないからインサイドで攻めようと思ったけどすべて防がれ仕方なく3Pを打とうとしてもブロックされるか外れるかだった。

第十一話「花に水を」

春仁side

なんで、俺がこんな朝っぱらから学校に来ないといけないんだよ。

これも咲耶のせいだ……。

（昨日）

咲「はる……」

俺が帰ろうとしたら咲耶に声をかけられた。

ってか、咲耶と話したのは病院に行った日以来か？

春「なに？」

咲「あの、えっと、明日の朝、花に水やってくれる？」

春「なんで？」

咲「明日、用事があつてできないから」

春「なんで俺なの？」

そんなこと俺じゃなくてもいいだろ。

つてか、めんどくさいことは引き受けたくないんだよね。

優「いいじゃん。春仁、やってやれよ」

春「意味わかんねえし。だったら、優貴がやれよ」

優「俺、朝苦手だよ」

春「いや、俺も苦手だから」

優「いいじゃん。たまにはさ」

春「だったら、お前も来いよ」

優「いやいや、俺めんどくさいこと引き受けないから」

出来たら俺も引き受けたくないよ。

つてか、これ俺が引き受けないと帰れない感じか？

春「はあ・・・わかった」

咲「ほ、ほんとに!?!」

春「ああ、なんか奢れよ」

咲「わかってる!!!じゃあ、バイバイ!!!」

なんて言って帰っていった。

それにしても遙の親に会ってから優貴はあまり遙のこと話さなくな
ったな。

あの日も会つのもやめよつって言ってそのまま帰ったし何があったん
だろう？

花に水をやっているとなると体育館の方からバスケットをしている音がした。

俺は何故か体育館の入り口に立っていた。

下手な奴とそこそこ上手い奴が1on1をやっていた。

第十二話「やっとのチャンス」(前書き)

友樹目線でいきます！

第十二話「やっとのチャンス」

友樹 side

や、やっと会えた。

僕がこの時をどれほど待ち望んだことか・・・そんなに待ってないな。

それでも望んでいたことに違いはない。

菊池さんはジッとこちらを見てすぐに背を向けて歩き出した。

拓「話しかけないの？」

友「えっ、あ、え・・・っ」と

拓「はあ、へタレ」

友「え？」

拓「菊池春仁——！！！！」

友「ええええええええええ！！！！」

なに叫んでるのこの人！？

ドヤ顔で見られても困る！！

春「・・・なに？」

ゆっくりと振り向いた顔は少しいらだっているように見えた。

拓「いやー、こいつがねアンタに話があるっていうもんだから」

友「ちょ、拓也なに言ってるんだよ！！」

拓「だって、そうでしょ？」

友「そうだけど・・・」

春「ねえ、帰っていい？」

拓「ダメ！つてか、そんな所にいないでこっち来て」

春「・・・めんどくさい」

拓「いいじゃん。ねっ！」

春「・・・わかった」

拓「ほら！友樹、話してみるもんだろ！！」

友「そ、そうだね」

でも、どうみてもいらだってるよ？

拓也は気付いてるのかな？

春「……で、話して?」

拓「それより、さっきのどつ思いつ?」

春「ああ?」

拓「いや、だからさっきの俺とこいつの」

春「……ちっちゃい奴が下手」

拓「ハハッ……」

凹んだ……僕はさらに凹んだのであった……。

拓「まあ、いいや。それより本題にはいるけど」

拓也に肘でつつかれ言うしかない状況になった。

友「あの、またバスケやりま「やだ」」

友「あ、あの〜・・・」

春「だから、やだ」

僕の勇気を振り絞って言った一言は言い切る前に砕け散ることとなりました。

第十三話「俺はやらな」と言った」（前書き）

会話が多い・・・

一応春仁目線

第十三話「俺はやらないと言った」

春仁side

優「ハハツ、それでそんなに不機嫌なのか」

春「笑い事じゃねえよ」

優「んー、それもどうだな。でも、またバスケやるのもいいかもよ？」

春「やらないよ」

優「じゃあ、放課後はいつものように女遊びか？」

春「・・・」

優「春仁って意外とヘタレだよな」

春「どういう意味だ？」

優「大事な一步が踏み出せないってこと、つまりヘタレなんだろう？」

春「・・・お前は俺にバスケットをやらせて言っつのか？」

優「もちろん」

春「はあ、わかった。三日だけやる。それでダメだと思ったらバスケット部には入らない」

優「んじゃ、そういうことで」

優貴は俺のことを知ってくれているから無茶なこととは言わない。

きつと、大丈夫だと思ってるから俺にこうやって言っただろう。

咲「はる、今朝はありがとね」

春「なんだ、咲耶か・・・」

咲「えっ！そのテンションの低さはなんですか!？」

春「それより戸谷いないか？」

咲「日向だったらさっきどっかに行ったよ」

春「そつか。なあ、咲耶。バスケット部の小さくて下手くそな奴知らないか？」

咲「そんなアバウトな説明じゃわかんないよー」

美「私わかるよ」

咲「み、美香ちゃん!？」

優「おっ、結構可愛い」

春（バシッ!）

優「いつてえ……」

春「知ってるってほんと？」

美「うん、だってバスケット部で小さい奴っていたら一人しかいないもん。それにそいつと幼馴染みだし」

咲「み、美香ちゃんの新情報ゲット！」

美「なに馬鹿なこと言ってるの」

咲「だって、美香ちゃんのことまだちょっとしか知らないもん」

美「いっつも咲耶が話してるからね」

春「どうでもいいけど、名前教えてくれない？」

美「あっ、そうだったね。そいつの名前は新田友樹だよ」

春「新田友樹か・・・」

美「友になんか用でもあるの？」

春「ちよつとな・・・」

優「なにがちよつとだよ。結構大変なことだぞ？あの、菊池春仁が復歸するんだから」

春「でも、完全復歸じゃないから」

咲「はる、またバスケやるの？」

春「少しだけやるだけ」

美「菊池君ってバスケやってるの？」

優「まあ、正確に言つとやってただけどね」

美「そうなんだ。友がねある選手とバスケを一緒にやるのが夢つて言つてたから」

優「そのある選手つてのが春仁のことだろうな」

美「そうなの？友が聞いたら喜ぶよ」

春「つてか、牧田さんと幼馴染みだったら昼休みにここに呼び出してくれない？」

優「おいおい、自分で新田君の教室行けよ」

春「クラス知らないし」

優「美香さんに聞いたらいいいじゃんか」

春「でも・・・」

つてか、いきなり美香さんって呼ぶのかよ。

美「友だつたら呼んだらすぐ来るよ？」

春「お願いします」

美「ふふっ、わかった。昼休みにここに呼んだらいいんだね？」

春「はい」

咲「なんか、はるの腰がめっちゃ低い」

優「一人で知らない教室に行くのが嫌なんだろうな」

咲「そっか、はるって人見知りだもんね」

優「春仁はヘタレだからな」

おい、その会話聞こえてるんだよ。

まあ、人見知りなのは認めるけどヘタレってなんだよ。

優「さてと、今日の放課後は春仁はキャンセルでいいか？」

春「よろしく。修平にも言っといて」

優「わかった。もしかしたら春仁は俺たちの集まりにはもう来ないかもな」

春「・・・行くよ」

優「遥が戻ってくるまで来るの？」

春「ああ」

俺はやらないといけないことがある。

そのためだったらなんでもやるんだ。

優「そっか、まあ、こればかりは俺にはなんにも言えないからな」

春「情報もってる奴集めとして」

優「わかりましたよ。でも、バスケは集中してやるんだぞ」

春「わかってるよ」

バスケットを中途半端にやると怒られるから……

第十四話「俺はやると言った」

春仁 side

なんか緊張してきた・・・

あれから今、つまり昼休みまで気が気ではなかった。

ちゃんとバスケがやれるのかとか不安でしかたなかった。

優「おい、メシ食おうぜ」

春「新田に会ってから食うよ」

美「友だったら、すぐに行きます！って返信来てるから来るのはや
いと思うよ」

咲「そんなにはやいの？」

美「うん、はやいと思うよ・・・ほら、来た」

そう言つて牧田さんが扉の方に指をさしたのでそつちを見ると今日の朝に見た小さい奴が息を切らしていた。

美「あれが新田友樹」

優「ほほう、あれが春仁をバスケットに誘つた命知らずなやつか」

友「えっ、あの、僕のことですか？」

そう言いながら新田は俺たちの方に歩いて来た。

咲「そつだよー。はるのことバスケットに誘つたのつて君でしょ？」

友「あ、はい。でも、断られちゃつて・・・」

優「そんな春仁からお知らせがあります！」

友「えっ！？な、なんですか！？もももも、もしかして、ほ、ほんとに僕の命を……」

美「友、うるさい」

友「あ……ごめん」

優「ははっ、お前って肩身狭いな……。春仁のお知らせはそんなことじゃないよ」

友「そ、そうなんですか……。よかった……」

優「ほら、春仁言えよ」

春「あ、ああ……」

友「えっ？三日だけなの？」

優「ごめんね、こいつヘタレだから三日が限界なの」

春「ヘタレってどういう意味だよ」

優「まあ、チームがいい感じだったら入部するって約束だから大丈夫だよ」

友「そうですか、がんばらなきゃですね！」

優「そう、だからがんばってね」

友「はい！」

・・・なんか勝手に話しが進んでる。

もう、入部する雰囲気じゃねえか。

それでも俺は一步踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5148v/>

この街で起きた奇跡

2012年1月6日02時45分発行